

平成 20 年度文部科学省「総合的な放課後対策推進のための調査研究」委託研究報告書

## HGUアウトリーチ コミュニティ・キッズ教室

不就学に陥った外国人の子どもへの緊急措置

文部科学省放課後活動支援モデル事業

2009 年 3 月

浜松学院大学



はじめに

本事業は時期的には年度末であったけれども、本学の津村教授が浜松市の社会教育委員長を務めるかわら、外国人の子どもたちの就学問題に精通していることもあり、事業の重要性、緊急性を理解した上で、大学として何ができるかにトライしたものである。

100年に一度といわれる経済不況の影響をまともに受けたのは外国人労働者であった。彼らの多くは非正規労働に従事しており、仕事を失う中で、子どもたちも学校に通えなくなるという事態にまで追いこめられていった。もちろん外国人学校の財政基盤や公立学校の受け入れ態勢の問題も背景にあることはいうまでもない。そして何よりも不就学に陥った子どもたちは、社会構造上、複合的要因から生み出されているとの認識が求められよう。

本事業が、放課後活動支援モデル事業というくくりを持ちつつも、こと外国人の子どもたちは、不就学という通常の学校教育を受ける機会も奪われており、それは社会との関係も絶たれるということにもつながっている。

ゆえに学習の連続性が奪われている外国人の子どもを対象として学びの場や機会を構築するという目的が導き出された。

しかし本事業を遂行するにあたって、カトリック浜松教会の協力がなければ事業の具体化まではたどりつかなかった。それはとりもなおさず、大学の社会的責任とマイノリティの関係で言えば、大学の社会的資源としての施設を提供するところにまでいかなかったという私たちの問題を自覚することになる。けれども本事業をやったことで、大学の地域連携として、外国人の不就学を地域課題と捉え、その解決のためにエスニックコミュニティをパートナーとし、大学が事業主体となることによって、エスニックコミュニティの組織化と自立を促すという役割を果たすという新たな可能性を発見できたことの意味は大きい。

また本事業に参加する外国人の子どもたちが、一様に事業に参加している間は、そこを大切な居場所としていたこと、すなわち子どもにとって学校という場は、学習するだけでなく、安心して自分を表現できる関係を築く場であることも確認された。

並行して実施した不就学の子どもたちの学習の場構築の枠組みの調査研究から、異質協働、異年齢集団による課題解決学習や総合学習の有効性が確認された。このことは日本の教育の在り方にも一石を投じている。多文化社会到来における学校カリキュラムや放課後活動支援の見直しと、外国人学校の地域との積極的な連携の必要性が浮き彫りになった。エスニックコミュニティと地域社会（自治体、市民団体、公立学校や大学）の協働により、より多くの外国人の子どもたちの学習と生活の場の創出が求められており、事業としても年間を通して継続的に実施されていくべきものであることも指摘しておきたい。

最後に大学が社会から必要とされる公共性をどう確立していくのかという課題に対して、私学にとっては経営に即つながりにくいマイノリティ問題に対して、挑戦する大学があるという自負と、対処療法で終わらない多文化共生社会の確立に向けての継続的な働きかけをこれからもしていくことを誓いながら、本事業を終えたい。

大野木龍太郎（浜松学院大学現代コミュニケーション学科長）



## 不就学に陥った外国人の子どもへの緊急措置

文部科学省放課後活動支援モデル事業

### 目次

<b>第1章 放課後活動支援モデル事業 コミュニティ・キッズ教室</b> .....	1
1.カトリック浜松教会 コミュニティ・キッズ教室.....	1
2.モノづくり・シクミづくりPJ コミュニティ・キッズ教室.....	3
<b>第2章 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」報告</b> .....	5
不就学に陥った外国人の子どもへの緊急措置について .....	5
<b>第3章 関係資料</b>	
カトリック浜松教会 コミュニティ・キッズ教室 学習記録	
「日本語」	

#### 「浜松学院大学放課後子どもプラン推進委員会」

津村公博:准教授 研究者(責任者、全体総括)

籠幾緒:学部長・教授 研究者(調査、評価)

大野木龍太郎:学科長・教授(調査、評価)

吉田佐織:浜松市 企画部国際課(評価)

近藤美樹:浜松学院大学 総務課



## 第1章 放課後活動支援モデル事業 コミュニティ・キッズ教室

### 1.カトリック浜松教会 コミュニティ・キッズ教室

#### 事業目的

経済不況により外国人学校を退学した（あるいは退学の可能性のある）子どもに対して、地域の社会資源を活用して、新たな学習の機会を創出することを本事業の目的とする。具体的には、カトリック浜松教会内にコミュニティ・キッズ教室を設置し、学習の連続性が脅かされている外国人の子どもに学習機会を提供することである。

#### 事業内容

- ・実施期間：平成21年2月13日から平成21年3月25日
- ・実施回数：全18回
- ・実施時間：9：00～15：30
- ・平均参加者数：24.2人（未就学児の参加は10人～12人）
- ・参加した子どもの国籍：ブラジル
- ・授業：教科指導（ポルトガル語・数学・日本語）9：00～12：00  
実技指導（音楽・ダンス・体育・図工）13：30～15：30  
総合学習 3月6日 大学生ボランティアグループとの交流  
3月16日 認知症高齢者との交流  
3月20日 海の星高校（生徒5人・教員1人）による交流活動

#### 事業成果

- ・居場所としての役割  
外国人学校に在籍していた者の多くは、一日の大半を学校で過ごしていた。外国人学校の退学を余儀なくされた子どもに対して、本事業は安心・安全の場を提供した。
- ・保護者の就労支援  
教室へ子どもを連れて来る保護者に対し、子どもが授業を受けている時間帯に就労のための日本語教室を実施した。
- ・大学の地域連携の実現  
本事業の実施主体となり、地域の課題解決や地域の育成、活性化などに貢献し、公共的役割を担った。
- ・エスニック・コミュニティの組織化・活性化  
子どもの学習の連続性が分断されているという緊急課題に対して、エスニック・コミュニティが大学の側面的な支援を受け、主体的に関与し解決できることを示した。

	日にち	参加者数	
教科指導 ・ 実技指導	2月13日	20人	<b>【教科指導風景】</b>  低学年のポルトガル語授業  カルタを使った低学年の日本語授業
	2月16日	18人	
	2月18日	20人	
	2月20日	22人	
	2月23日	28人	
	2月25日	24人	
	2月27日	23人	
	3月2日	23人	
	3月4日	25人	
	3月6日	23人	
	3月9日	26人	
	3月11日	26人	
	3月13日	26人	
	3月16日	26人	
	3月18日	26人	
	3月20日	25人	
	3月23日	27人	
3月25日	28人		
総合学習	<b>【実技指導】</b>		 ブラジルの柔術カポイエラ  午後は主に体験活動を通して学ぶ授業
	3月6日	大学生ボランティアグループとの交流	
	3月16日	認知症高齢者との交流	
	3月20日	海の星高校(生徒5人・教員1人)との交流	
	 高齢者の方との交流。子どもが駆け寄ると、中には涙を流す方もいました。		
 近隣の海の星高校との交流。			



## 2.モノづくり・シクミづくりPJ コミュニティ・キッズ教室 活動報告

津村 公博

### 事業目的

経済不況により、外国人学校を退学した（あるいは可能性のある）子どもに対して、地域の社会資源を活用して、新たな学びの機会を創出することを本事業の目的とする。具体的には、モノづくり・シクミづくりPJを協力団体として、ムンド・デ・アレグリア学校の子どもや地域の子どもを対象として新たな学習の場や機会を提供する。

### 事業内容

- ・名称：モノづくり・シクミづくりPJ コミュニティ・キッズ教室
- ・実施期間：2009年2月17日から2009年3月27日
- ・実施回数：全10回
- ・参加した子どもの数：ムンド・デ・アレグリア学校に在籍する子ども17人
- ・参加した子どもの国籍：ブラジル、ペルー
- ・農業体験：さつまいもの育苗床づくり、バイオ苗の植え付け  
玉ねぎの肥育（雑草取り）と追肥、収穫（掘取り・根と茎葉切り）
- ・農業学習：地域の代表的な作物（米・さつまいも・玉ねぎ）について説明し、地産地食の意義を理解する。特に静岡西部地域の稲作について2～9月までの農作業のサイクルを教えた。
- ・食農食育：収穫した作物を子ども自身が調理し食べることで、食の大切さと人と自然への感謝の気持ちを育む。

### 事業成果

参加した子どもに地域の大人と話す機会を提供することができた。本事業の実施がコミュニケーション力を試す機会となり、また地域に対して誇りや愛着を感じるようになった。

- ・農業体験  
さつまいもの育苗床づくり、バイオ苗の植え付けなどを通して農業に関心を持つとともに、地域で栽培される農産物への親近感・関心が高まった。
- ・農業学習  
浜松で実際に行われている玉ねぎ、さつまいも、稲作の栽培方法を学習した。稲作に関する学習では、2月の田起こしから9月の稲刈りまでの過程を写真と共に説明したことで、授業を聞いた子どもの中に農業に関心を持った子どもがいた。
- ・食農食育  
地域の人たちの指導を得ながら外国人の子どもが自ら栽培に携わった食材を、授業最終日に皆で調理し食べることで、最後までやり遂げた達成感を得ることができた。また、地域で作られた農作物が地域で消費される地産地消やフード・マイレージの考え方まで理解が進んだ。

	日にち	内容	ムンド参加者数	協力者参加者数	
農業体験	2月17日	さつまいも⇒床づくり	17人	4人	
	2月18日	苗植え	17人	4人	
	3月15日	玉ねぎ⇒草取り	17人	4人	
	3月18日	収穫	17人	4人	
	3月20日	夏野菜の種蒔き	17人	4人	
					
	さつまいもの育苗、床づくり作業をしました。	夏野菜の種まきをしました。			
					
	子どもたちが収穫を行いました。	夏野菜はここまで元気に育ってきました。			
農業学習	3月23日	稲作	17人	1人	
	3月24日	さつまいも	17人	1人	
	3月25日	玉ねぎ	17人	1人	
	3月23日の稲作の学習会は、使用した教材を参照して下さい。				
食農食育	3月26日	お餅・ご飯・焼き芋・カレー作り	17人	8人	
	3月27日		17人	11人	
					
		近所のケーキ屋さんの厨房を借り、指導を受けながら、カレーを作りました。	収穫されたお米を炊いて餅つきをしました。		
					
	保護者も一緒に作業しました。	今までの活動を写真の展示で振り返りました。			

## 第2章 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」報告

### 不就学に陥った外国人の子どもへの緊急措置について 文部科学省放課後活動支援モデル事業 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

津村 公博

#### I. 放課後活動支援モデル事業 コミュニティ・キッズ教室

##### 1. 事業の背景

###### ①外国人の子どもを取り巻く教育環境

出入国管理及び難民認定法改正以降急増した南米日系人は、当初、短期滞在で貯蓄目標を達すると帰国する傾向が見られたが、近年では滞在が長期化し、家族を伴っての定住化傾向が見られる。それに伴い、南米日系人を主とした外国人が日本社会で抱える問題は、就労、医療、子育て、教育、住宅、地域生活など多岐に渡っている。外国人の子どもの多くは出稼ぎ目的の両親と共に来日し、日本社会や学校生活への適応を強いられてきたわけだが、日本語習得や教科内容習得の困難からくる学業不振や不就学の子どもの存在など、外国人の子どもの教育問題は深刻さを増している。これは日本における外国人の子どもの教育が、依然として十分に機能していないからである。日本の公教育システムは外国人の子どもに適正で必要な教育を与えることができず、社会で生きていくために必要な学力を十分に保障できていない。一方、外国人学校は日本の公教育システムの外側に置かれ、教育内容、教育環境の他、卒業後の進路さえほとんど把握できないのが現状である。

###### ②経済不況以降の外国人の子どもの教育環境

2008年末の米国発の金融危機を発端とする未曾有の経済不況によって、労働階層の底辺にいる外国人の派遣労働者は、早い段階で派遣契約打ち切りの対象となっており、このことが外国人の子どもに大きな影響を与えている。外国人の子どもは義務教育ではないため、生活が困窮すれば教育の機会を失うことも少なくないからである。

外国人の場合には義務教育を修了しても同世代の日本人と同様の社会的・経済的な接触を持ち得る環境下になく、主体的に社会参加することはできず、社会の周辺に置かれることになってしまう。経済不況によって義務教育の段階で退学を強えられることは、基礎学力や日本語能力も身に付かないまま社会に放り出すことを意味するのである。

##### 2. 事業の目的

親が職を失えば子どもの学習機会が奪われてしまうことも起こりうる。学習の連続性が分断されることは、学力低下を招く。また、子どもの精神的健康の維持・促進及び自律性や社会性などの育成にも大きな影響を及ぼしかねない。

そこで、外国人学校を退学した（あるいは退学の可能性がある）子どもを対象として新たな学習の場と機会を創出し、学習の連続性を保障することを目的として、コミュニティ・キッズ教室を実施した。

##### 3. 実施期間

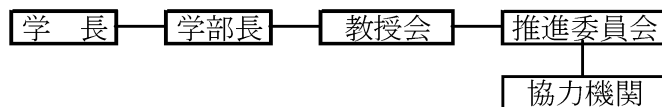
2009年2月13日から2009年3月25日

##### 4. 実施主体

浜松学院大学内に「浜松学院大学放課後子どもプラン推進委員会」を設立し、これを事業主体とする。「浜松学院大学放課後子どもプラン推進委員会」は、カトリック浜松教会に存在するエスニック・

コミュニティを協力機関として、カトリック浜松教会内に教室を設置し、学校を退学した（あるいは退学の可能性がある）外国人の子どもに学習の機会を提供するとともに、日本人の子どもも共に学べる場を創出する

※組織図



5.実施結果

実施回数	全 18 回	
実施日	毎週月・水・金曜日	
実施時間	9:00~15:30	
平均参加者数	24.2人（未就学児の参加は10人~12人）	
参加した子どもの国籍	ブラジル	
授業内容	教科指導	ポルトガル語・数学・日本語（9:00~12:00）
	実技指導	音楽・ダンス・体育・図工（13:30~15:30）
	総合学習	3月6日 大学生ボランティアグループとの交流 3月16日 認知症高齢者との交流 3月20日 浜松海の星高校生徒・教員との交流

参加者数推移（学齢期の子ども）

第1回	20人	第11回	26人
第2回	18人	第12回	26人
第3回	20人	第13回	26人
第4回	22人	第14回	26人
第5回	28人	第15回	26人
第6回	24人	第16回	25人
第7回	23人	第17回	27人
第8回	23人	第18回	28人
第9回	25人		
第10回	23人		

## II.総合的な放課後対策推進のための調査研究

### 1.調査研究の目的

本調査研究の目的は、不就学に陥った（あるいは陥る可能性のある）外国人の子どもが学習する場を構築するにあたって、実効性のある枠組を検証することである。本事業の成果を一つの事例として紹介しながら、不就学に陥った子どもの居住地を特定化し、学習の機会と場を提供するにはどのような社会資源が必要なのかを報告する。さらに、大学が地域の抱える課題を解決するために取り組む意義と、多文化社会におけるエスニック・コミュニティ<sup>2</sup>の存在意義と役割について検証する。

### 2.調査研究の方法

- ・授業の教務コーディネーター、ポルトガル語・数学・日本語の指導者<sup>3</sup>による授業報告書及び、聞き取り調査
- ・エスニック・コミュニティの代表者、構成員への聞き取り調査

### 3.コミュニティ・キッズ教室の評価

#### ①学習の継続

##### a) 午前中の授業

午前中の授業では、年齢に応じてAクラス（6歳～7歳児の低学年）、Bクラス（8歳～9歳児の中学年）、Cクラス（10歳児以上）の3クラスに分けたものの、ポルトガル語能力、数学の理解力、日本語能力には大きな差があることが確認できた。

外国人学校に在籍する子どもにとって、学校での生活言語はポルトガル語である。また、教科指導はポルトガル語で行われるため、学習思考言語としてのポルトガル語が身につくはずであるが、ポルトガル語の4技能（聞く・話す・読む・書く）にも個人差が見られた。

数学にも同様の傾向が見られ、簡単な四則計算さえできない子どももいた。

日本語に関しても、聞く・話すことが全くできない者もいれば、小学校低学年程度の読み書きができる者もいるなど、日本語能力にも個人差が顕著に見られ、指導者も「日本語習得レベルも違い、授業の進め方に工夫が必要である（1回目の授業：2月13日から）」と指導の難しさを予測していた。

外国人の子どもに見られるこうした低い学力は、これまでの学習歴が大きく影響していると思われる。外国人の子どもは親の雇用が不安定であることから国内での学校間移動の経験を持つ者が多い。

公立学校間の移動、公立学校と外国人学校間の移動が、複数回に及ぶ子どもは少なくない<sup>4</sup>。学業不振の背景には学校間の移動によって学習の連続性が阻害されているという問題も考えられる。

また、参加した子どもが在籍していた外国人学校もばらばらであった。それぞれの外国人学校が異なる教育システムを採用しており、使用する教科書も採用する教育システムによって決定される<sup>5</sup>。そのため、外国人学校間の移動により教育システムや教科書が変わると学習の連続性が損なわれる可能性もある。指導者からは、外国人学校により数学やポルトガル語のカリキュラムが異なり、それが一斉授業を困難にしているとの指摘を受けた。しかし、参加した子どもの基礎学力には個々に大きな差があるものの、多くの子どもの学習意欲は高く、学ぶ事への渴望は大きかった。事業実施後に指導者に行った聞き取り調査でも、「(子どもたちは) 最初から勉強したくてしかたない感じだった。それだけ勉強に飢えていた」と振り返っていた。

##### b) 午後の授業

午後の授業は、音楽、ダンス、体育、レクリエーション活動など実技を中心とした授業である。施設内の大きなホールを使用して異年齢の学習集団を作り、学び合う協同学習の形態を取り入れた。異年齢の子どもたちが課題解決型の学習活動に関わることで、個々の子どもの経験や知識が積極的に交換されるなどの光景が見られた。こうした活動が継続されることで、自律的に学びの共同体が形成さ

れるようになったと思われる。不就学に陥り異年齢の子どもとの交流が断たれている子どもにとって、学びの共同体の中で交流し、学び合う学習活動には大きな効果があったのではないのだろうか。

参加した子どもの中には浜松で生まれ、13年もの間一度も就学経験のない者がいたが、午後の授業で他の子どもに受け入れられる経験を通して、自らもその学習共同体を活性化する役割を果たした。

指導者によれば、「彼は午前中の授業で一言も話せないし、奇声をあげるなど問題行動もあった。しかし、午後の授業では課題活動に積極的に取り組んでおり、特に小さい子どもがいつも彼の回りにいて彼を慕っていた。彼も小さい子どもの面倒をよく見ていたが、そのことが彼に自信をつけた」とのことであった。

### c) 総合学習の時間

本事業では総合学習を午後の授業の中に導入し、子ども自身の興味や関心を重視しながら、子ども自らの発見を学びに結び付けていくことを目的とした。そのため、高校生、大学生、高齢者など地域の人々との交流の機会を設けた。例えば、3月16日には認知症高齢者との交流が行われ、日本の家族の在り方をテーマに話し合った。家族と離れてグループホームに入所する理由を説明すると、子どもの中には目を潤ませて聞く者もいた。指導者は「家族を大切にすブラジル人には衝撃的だったようだ（授業報告書：3月16日）」と、地域の人々から学ぶ体験効果の大きさを指摘した。

### ②居場所としての役割

外国人学校を退学した外国人の子どもに対して、一日の中で最も長い時間を過ごす学校に代わる場を提供することができた。外国人学校に在籍する子どもを時間軸で捉え直してみると、家庭・学校・地域におけるそれぞれの生活が分断されており、連続性が損なわれていると言える。親の労働が長時間に及んだり、夫婦共働きだったりする場合、子どもは多くの時間を学校で過ごす。外国人学校の多くが午前・午後の二部制、あるいは夜間も加えての三部制を取っており、各家庭の都合に合わせて通い方を選択する。しかし、経済不況によって学校で過ごす時間を短くする子どもが増え、親が不在の家に帰ることになる。とりわけ、外国人学校を退学せざるを得なくなった子どもは一日の大半を家で過ごしていたが、本事業の実施によって彼らに居場所を提供することができた<sup>6</sup>。

以下の発言は、家庭とは別に居場所を求める子どもたちの気持ちを反映している。

「毎日、長時間家に閉じ込められ鬱積した気持ちから逃れることができた。子どもたちがいきいきと教会内を走り回る姿が印象的だった」（指導者の聞き取り調査から）

### ③保護者に対する支援

本事業を実施したことによって結果的に保護者の就労支援に繋がった。子どもが教室に来る際には、子どものみ来る場合と保護者に連れられて来る場合があった。従って子どものみ来た場合、保護者はその時間を求職活動にあてることが可能となった。また、子どもを連れて来た保護者は、そのまま教室運営に加わりながら、カトリック浜松教会の関係者に自らの生活や就労について相談を持ちかけることが多く、その結果、保護者を対象とした就労のための日本語教室（カトリック浜松教会主催）を開催する運びとなった。

## 4.運営者の評価

### ①事業主体の大学

#### 大学の地域連携

これまで日本の大学は学術研究や教育活動などにのみ専心し、地域に大きな意味や必要性を認めないできた。しかし、近年USR（University Social Responsibility：大学の社会的責任）が重要視され、大学が培ってきた知識・経験を応用し、いかに地域社会と連携協力を図り、地域の育成、活性化など地域貢献を果たすかが期待されている。本事業を実施したことによって、大学は外国人の子どもの不

就学を緊急に取り組むべき地域課題（ニーズ）と捉え、その解決のためにエスニック・コミュニティの社会資源（シーズ）を組み合わせるといふ、これまでにない社会の新しい仕組みをデザインする役割を担ったと言える。つまり、公的な支援を受けることが困難なエスニック・コミュニティに対して、大学が国からの公金支出の受け皿となり、本事業に必要な人材など新たな資源の提供を可能にしたと言える。また、大学はエスニック・コミュニティに対して本事業参加を要請したことで、次に述べるように、結果的にエスニック・コミュニティ自らがさらなる組織化と自立を促すというエンパワーメントの役割を果たしたと言えるのではないだろうか。

## ②事業協力者

### エスニック・コミュニティの組織化と活性化

カトリック浜松教会内にある各エスニック・コミュニティは互いに「兄弟、姉妹（カトリック浜松教会）」であるものの十分に交流は進まなかった。しかし、事業を遂行する過程で教育、送迎、給食などの役割を積極的に協力し合うなど、一体感が見られた。カトリック浜松教会ではこれを「まじわりのまじわり」と表現している。

また、組織的にも具体的な変化が見られた。本来、各エスニック・コミュニティがそれぞれに委員会を構成し、その代表者が代表者委員会を構成していた。しかし、本事業の実施により組織化が進んだ結果、各委員会を解散し、各委員会の経理の一体化が実現した。

## III.見えてきた課題

### 不就学の子どもを生み出した公立学校と外国人学校

経済不況の影響を受けて外国人学校に在籍していた子どもが多くが授業料を払えず、退学の道を辿ることになった。そして、教育現場を離れた子どもが多くが不就学の状態に置かれている。ここで注意しなければならないことは、一度外国人学校を退学した子どもは地域から見えにくい存在となり、不就学の状態が長期化すればするほど復学が難しくなることである。この背景には外国人学校の法的地位や就学形態、保護者の雇用形態、外国人の登録など、様々な問題が複合的に絡み合っていると考えられる<sup>7</sup>。また、幸いにも居住地を特定できたとして、経済的理由によって外国人学校を退学した場合、生活の困窮が解決しない限り復学は難しい。それにも関わらず、公立学校への就学手続きはあまり進んでいないのが現状である<sup>8</sup>。教育を受ける場として外国人学校と公立学校かの二項対立的な位置づけが外国人学校から公立学校への転入を阻む理由となっているのではないだろうか。

教育委員会は外国人の子どもの受け入れに関して拒否しない姿勢を取っている。しかしながら地域によっては就学手続きに際して在留資格を確認したり、就学理由を求めたりするなど、外国人が教育を受ける権利を重視する文部科学省の考え<sup>9</sup>とは異なる姿勢を取る教育委員会もある。

また、教育現場から離脱した外国人の子どもの多くが外国人学校に在籍していたわけであり、外国人学校の在り方そのものにも大きな問題があると言わざるをえない。2008年末以降の経済不況によって多くの不就学の子どもを輩出した責任は免れない。経済不況以前から外国人学校の経営は不安定で、閉校や他校との合併、経営者の交代なども珍しいことではなかった。既に浜松市内でも外国人学校の閉校によって不就学に陥る子どもの事例も確認されていた<sup>10</sup>。外国人学校は教育制度の外側に存在することに甘んじ、公共性を担保する組織として準学校法人に組織変更することを怠ってきたと言える。また、浜松市内の外国人学校では退学者に対して公立学校への転入支援も行っていなかった。

## IV.今後の研究課題と外国人支援の在り方

### エスニック・コミュニティのエンパワーメント

公立学校に在籍する外国人の子どもに対しては、NPO やボランティア団体などが主体となって日本語や学習などの支援活動を行っている。しかし、不就学の子どもが存在していることを地域の問題として捉え、解決に向けた効果的な措置を講じられずにきた。何故なら、地域住民や自治会、日本語

支援などを行っているボランティア団体でさえも不就学の子どものを見つけ出すことは難しいからである。不就学に陥っている子どもを支援するには、外国人自身の自助的な組織、あるいは団体であるエスニック・コミュニティ<sup>11</sup>の存在が不可欠である。

本事業の実施にあたっては、エスニック・コミュニティが保有する社会資源を有効に活用した。エスニック・コミュニティの構成員が外国人の集住地域に行き、不就学に陥った子どもを抱える外国人の家族を見つけて本事業への参加を勧めることで、不就学に陥っていた子どもに対して学習の連続性を保障することができた。国際化する地域社会で生じる様々な問題は日本人主体の支援のみでは解決につながらず、当事者である外国人あるいはエスニック・コミュニティ自らが主体的に関与しなければ本質的な問題解決にならないことが多い。南米日系人の滞在の長期化や定住化が進行する中でエスニック・コミュニティは自律的に形成され、生活不安や心理的ストレスの軽減、経済的な支援などに寄与してきた。しかし、エスニック・コミュニティはコミュニティの持つ特性（社会・文化的な違いなど）から他の機関との関係を築くことは難しい。そのため、エスニック・コミュニティとホスト社会の双方が協働して問題解決に向かうことが期待される。ホスト社会は支援者や専門家が主体的に支援するのではなく、エスニック・コミュニティが主体的に活動できるための側面的支援を実施することが肝要である。エスニック・コミュニティはホスト社会からの支援を求めるだけでなく<sup>12</sup>、自らの生活に影響を与える問題の解決に参加することが自立につながる。エスニック・コミュニティ自らが地域社会の構成員として義務を果たしつつ権利を主張できるよう、自律的な行動を起こすことが今後の課題となる。

## V.最後に

ここで、本事業の継続について触れたい。今回カトリック浜松教会に設置した教室は、あくまで緊急措置的な学習の場を創出することが目的であった。カトリック浜松教会の社会的ネットワークが、不就学に陥った子どもを見つけ出し、短期間ではあったものの学習の場に戻すことを可能にした。授業回数が増す毎に自律的に学習共同体として形成され、「学校らしい」雰囲気となっていった。参加した子どもや関係者からも今後「学校」としての継続を望む声が聞かれた。当面、経済不況が続くことが予測されることから、今後も学習機会を失う子どもが増加するものと思われる。そのため、カトリック浜松教会の緊急的受け皿としての役割は終えたとは言い難い。しかし、カトリック浜松教会は学校としての機能を保有していないため、長期的に不就学の子どもの預かるべきではないであろう。学習する権利を剥奪された子どもに学習の継続として、一時的な学びの機会を提供した後、市民や市民団体、企業、自治体と連携・協力し復学に結びつけるシステムを構築できれば、その役割を完遂することになると言えるだろう。

最後に、国や地方は出稼ぎ世代の子どもに対して、正面から向かい合う時が来た事を受け入れるべきである。外国人を受け入れる上で教育・社会保障を含む体制づくりに多大な社会的コストが生じるという指摘がある。しかしながら、不就学の子どものが放置されることは、目に見えない社会的コストが計上され続けていくと考えられ、この社会的コストが様々な形で表出することになる。いずれにせよ、社会的剥奪とも言える状況に置かれている子どもを社会に参加させる社会的コストは当然大きい。二つの文化資源を持つ子どもが二つの文化資源を開発できるような学習の場を新たに提供し、社会的コストを社会投資に変換させるような仕組みづくりを早急に着手すべきである。

<sup>1</sup>カトリック浜松教会⇒静岡県浜松市中区富塚町 2662 (<http://www.geocities.jp/hamamatsukyokai/>)

<sup>2</sup>エスニック・コミュニティは、共通した宗教・言語といった文化資本を持つ者同士が相互扶助の為に形成した集団である。多くのエスニック・コミュニティは、自ら教育活動を行う上で必要な資金、施設、機器、技術を持ち合わせていない場合が多い。しかし、カトリック浜松教会には本事業を実施するために必要な施設の他、知識、技能、人材など福祉的なニーズを充足できる社会資源を保有していることに加え、カトリック浜松教会内にブラジル人、ペルー人、フィリピン人、韓国人などのエスニック・コミュニティが形成されている。前述したように、外国人学校を離れた子



どもの存在を地域の中で見つけ出すことは難しく、本事業の実施にはエスニック・コミュニティの社会的ネットワーク、つまり社会関係資本を活用することが重要であると考えられた。外国人学校を退学した不就学の子どもの居住地などの情報は、外国人同士の口コミなどでもたらされることが多く、その背景にあるエスニック・コミュニティの社会的ネットワークが確認されている。

<sup>3</sup>ポルトガル語、数学の指導者は、解雇された外国人学校の教師を採用した。

<sup>4</sup>調査結果の詳細については、津村,澤田(2008年)を参照されたい。

<sup>5</sup>静岡県西部地域の外国人学校は、POSITIVO,OBJETIVO,COC,MAXI など様々な教科書を採用している。

<sup>6</sup>指導者は子どもたちが「毎日、長時間家に閉じ込められ鬱積した気持ちから逃れることができ、子どもたちがいきいきと教会内を走り回る姿が印象的だった」と、安寧とした自己の居場所として受け入れたと話した。

<sup>7</sup>①外国人学校は学校教育制度の外側に存在するため、各市町村の教育委員会は外国人学校に在籍する子どもの住所・在留資格・年齢・家族構成などの基礎的なデータを持ち合わせていない。そのため、各市町村の教育委員会は、外国人学校を退学した子どもを特定できない。また、外国人学校に在籍する子どもは市町村を超えて就学することも珍しくない。そのため、外国人学校を退学した後は、住所登録がある市町村の公立学校の就学することになり、市町村を越えた広域的な就学支援が必要となる。②経済不況以前から外国人労働者の雇用・非雇用は流動的であり、より賃金の良い職を求めて国内移動を繰り返すことが常態化していた(筆者は2006年11月より「南米日系人の子どもの教育と就労に関する調査」を行っている。外国人の子どもの国内の移動については津村,澤田(2008年)を参照されたい)。③先の②の理由で市町村を越境しても現在の外国人登録法は転出届が必要ないため、転入先の市町村では転入時期の確認にズレが生じ、就学案内の送付が遅れてしまうこともある。

<sup>8</sup>浜松市教育支援相談センターによると、2008年11月～2009年3月までに、外国人学校の退学者で公立学校への入学手続きをした者は55人である。2009年3月末現在の浜松市内6校の外国人学校の退学者は、270人から300人程度いると思われる(筆者による訪問聞き取り調査,2008年3月25日)。退学者の中には登録住所が浜松市でない者もいるため正確な不就学者数が分からないが、不就学者は相当数いると考えられる。2008年12月1日～2009年2月2日に実施した全国的な調査(文部科学省,2009年)では、「自宅・不就学等」が598人で全体の34.8%を占めていた。また、「公立学校へ転入」は160人(9.35%)で10%にも満たない。「本国に帰国」が一番多く722人(42.0%)である。その他は、「他のブラジル人学校等への転校」が53人(3.1%)、「不明」が185人(10.8%)であった。

<sup>9</sup>初等中等教育における外国人児童生徒教育の充実のための検討会(2008年)

<sup>10</sup>例えば筆者が行ったエスコラ・ウノ閉校後に残された教員への聞き取り調査によると、在籍した子どもの多くは他の外国人学校に転入し、2人が公立学校に転入した。しかし、少なくとも3人の子どもは外国人学校や公立学校に就学できず不就学に陥ったことが確認されている。

<sup>11</sup>浜松市内には外国人を対象とした多くの教会が存在し、教会メンバーによる様々なエスニック・コミュニティが形成されている。キリスト教会以外の紐帯としては、外国人が集住する地域(浜松市中区佐鳴台・南区砂丘)にエスニック・コミュニティがある。また、外国人学校の在籍者の家族から構成されるコミュニティもある。また、かつては日本の公立学校(浜松市中区瑞穂小学校)の外国人保護者会から始まったコミュニティも存在した。

<sup>12</sup>文部科学省中央教育審議会(2005年)によると、大学の社会貢献を重要視し、「大学の社会貢献の役割を大学の「第三の使命」としてとらえていくべき」としている。

## 参考文献

文部科学省「ブラジル人学校の実態調査研究結果について」,2009年.

初等中等教育における外国人児童生徒教育の充実のための検討会「外国人児童生徒教育の充実方策について」,文部科学省,2008年.

津村公博,澤田敬人「社会の底辺に滞留する南米日系人の青少年たち」『アジア遊学(特集-日本に暮らす外国人:地方都市の日系人・アジア人)』勉誠出版,2008年.

文部科学省 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像(答申)」,2005年.



### 第3章 関係資料

カトリック浜松教会 コミュニティ・キッズ教室 学習記録

「日本語」

午前中に実施した「日本語」の授業の記録を参考資料としました。内容は一部、授業担当者の承諾を得て、事業担当者により改変しています。また、学習記録に記載されていた実名及び本人が容易に推測されうる箇所は、事業担当者の判断で省きました。



学習記録 (1回目)

2009年2月13日(金) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
A 9:00	自己紹介(名前、年齢、出身学校、日本語の経験)をしながら、気持ちをほぐす。授業に必要な指示語を日本語で学ぶ。「立ちましょう。座りましょう。手(右手・左手)を上げてください。見て下さい・・・etc」	それぞれ出身校も学年も、日本語習得レベルも違い、授業の進め方に工夫が必要である。	一様にして会話力は乏しいので、そこに力を入れた。	7人
B 10:00	自己紹介(名前、年齢、日本語の経験)をしながら、気持ちをほぐす。授業に必要な指示語を日本語で学ぶ。「立ちましょう。座りましょう。手(右手・左手)を上げてください。見て下さい・・・etc」	問題点と会話の練習の必要性は同上。殆どの生徒がひらがなは習得している様子。	Eが全く日本語学習の経験がない為、彼女に対する特別な配慮が必要。	8人
C 11:00	自己紹介は無理だったので、子どもの名前を教諭が質問して、紙に日本語で書いて見せる。授業に必要な指示語を日本語で学ぶ。「立ちましょう。座りましょう。」	授業中、長時間の集中は非常に難しく、座る事から始める。幼児用の絵本を見る。	注目させる事も座って勉強の大勢を作る事も、今日は大変だった。次回からは勉強の姿勢から取組みたい。	5人
<p>《全体の印象》</p> <p>初日で、2組の小さい子ども達が兄弟から離れず一緒に授業に入ることとなったが、授業の妨げにはならずむしろ積極的に答えてくれたので安心した。皆、初めは不安そうな面持ちだったが、帰るころには少し、緊張が解け、笑顔がみられた。</p> <p>クラスを年齢により3つに分けたが、日本語能力に大きな違いが見られた。</p>				

学習記録 (2回目)

2009年2月16日(月) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
A 9:00	自己紹介の復習。ポジションと『置く』という動詞の勉強(上下、左右、前後)。本、紙、花を指示に従い、置いてみる。ひらがなの表を渡し、書き取りする。漢字の学習「上下、左右」。	自分達同士でも指示を出し合い、理解を深める。指示を工夫して複雑にし、相手に伝える生徒もいた。	置くという動詞をよく理解した様子。ただ、会話のレベルできちんと達成できたか、明日から授業以外でも生活の中で確認したい。	5人
B 10:00	自己紹介の復習。ポジションと『置く』という動詞の勉強(上下、左右、前後)。本、紙、花を指示に従い、置いてみる。ひらがなの表を渡し、書き取りする。漢字の学習「上下、左右」。	自分達同士でも指示を出し合い、理解を深める。指示を理解し実行できるが、実際指示を出すのが困難な様子。	置くという動詞をよく理解した様子。ただ、会話のレベルできちんと達成できたか、明日から授業以外でも生活の中で確認したい。	7人
C 11:00	自分の名前を言う。数を日本語で数えてみる(16まで)。日本語で色の名前を学習し、絵を描いてみる。	彼らの現状が椅子に座って話を聞く状態にないので、注意を引くのに大変だった。Lはお絵描きが得意らしく、意欲的に取組んでいた。	次回もまず「座って下さい」を徹底させよう。授業を落ち着いて進行させるには、DとEを離す事がポイント。特にEに声掛けが必要。	6人
<p>《全体の印象》</p> <p>一斉授業を受ける準備ができていない子どもが多い。不就学状態の期間が長い分だけ、学習習慣が定着していないようだ。</p>				

学習記録 (3回目)

2009年2月18日(水) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
A 9:00	ポジションと『置く』という動詞の勉強(上下、左右、前後)。本、紙、花を指示に従い、置いてみる。ひらがなの表を渡し、書き取りする。漢字の学習「上下、左右、置く、入れる」。	みんな、一生懸命に取り組んで、理解が進んだ	特になし	7人
B 10:00	ポジションと『置く』という動詞の勉強(上下、左右、前後)。本、紙、花を指示に従い、置いてみる。ひらがなの表を渡し、書き取りする。漢字の学習「上下、左右、置く、入れる」。	みんな、一生懸命に取り組んでいたが、個人差も見られた。	特になし	8人
C 11:00	自己紹介の復習。 日本語で色の名前を学習。	みんな、一生懸命に取り組んでいた。	AとBの子どもに落ち着きが全く見られなかった。	5人
<p>《全体の印象》 AとBの子どもが、授業に集中できないようだった。全体的には、熱心に取り組む姿勢が見られたが、まだ皆で学ぶ一体感がない。</p>				

学習記録 (4回目)

2009年2月20日(金) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
A 9:00	昨日は担当教諭不在だった為、理解度を確認する為に『入れる』を各生徒に実践させる(指示の複雑化)。本日の課題は『時計の読み方』。漢字の確認。	「今、何時ですか？」の問いに各自答えさせ、2人組にして会話をさせる。	時計の読み方は問題なく理解できた様子。生活の中で時折、子どもに質問して確認したい。	6人
B 10:00	昨日は担当教諭が不在だった為、理解度を確認する為に『入れる』を各生徒に実践させる(指示の複雑化)。本日の課題は『時計の読み方』。漢字の確認。	「今、何時ですか？」の問いに各自答えさせ、2人組にして会話をさせる。	時計の読み方は問題なく理解できた様子。生活の中で時折、子どもに質問して確認したい。	9人
C 11:00	色と数の確認。教諭の指示、特に「鉛筆を置いてください」「見てください」「聞いて下さい」を徹底させる。	教諭の指示をまだ生徒が理解していない状態。説明をするのに鉛筆を机の上に置いて、聴く姿勢に持っていきまて今日は時間がかかった。身につくまで何度も繰り返す。	とにかく「授業」という観念が子ども達の中にないので、教諭が話し始めたら「聴く」というルールを体得させるのに一苦労だ。やっと座る事ができるようになったので、次は、「聴く」姿勢を徹底させたい。	7人
<p>《全体の印象》 全体的に落ち着いてきた。就学支援に取り組んでいる関係者以外も他の活動のために出入りが激しい為、生徒の集中を欠くことがある。もう少し、教会の方たちにも理解をしていただき、子ども達が学習しやすい環境を共に作っていく必要性を感じた。</p>				

学習記録 (5 回目)

2009 年 2 月 23 日 (月) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
A 9:00	『時計の読み方』の復習。本日の課題はプリントを活用し、『これは何ですか?』『何処にありますか?』の質問に対し、生徒に答えさせる。	会話できるようになったら各自前へ出て、ホワイトボードに物の名前を書いてみる。喜んで書いていた。皆の前で書くことにより、自信がついたように見えた。	今回は初めて全ての生徒を前に出して、ホワイトボードに書かせてみる冒険をした。ひらがなは皆、習得した様子。今度からは、カタカナと習った漢字を活用するように仕向けていきたい。	7 人
B 10:00	『時計の読み方』の復習。本日の課題はプリントを活用し、『これは何ですか?』『何処にありますか?』の勉強。	質問に対し指でプリントの絵を指し示し、会話へと移っていく。生徒が認知している単語数が乏しいので、いちいち問題に躓き、少々苦労した。	EとFが全くゼロからの日本語なので、特別に彼らの為に助手が必要である。ジェシカ(補助員)がよく見ているが、劣等感を抱かぬような配慮が必要。	13 人
C 11:00	ひらがなの書き取りの練習。『時間』を学習する。	FとG、Hは単語の書き取りまで進む。全体的に時計の読み方は難しかった。	数は日本語で20まで教えられるが、数の概念がないようだ。時計で数字を読むことに繋がらず、理解するまで毎日繰り返してみよう。	8 人
<p>《全体の印象》                      クラス全体に落ち着きが出てきた。EとFは不就学が長く日本語が全く話せないため、特別な配慮が必要とされる。</p>				

学習記録 (6 回目)

2009 年 2 月 25 日 (水) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
A 9:00	「ある」と「いる」のちがいの学習。プリントを活用する。物の名前を日本語で学習し、次いで「ある」と「ない」に分類していく作業をする。	「ある」と「ない」に分類し、生徒が模造紙に書きだした。答えた人が書くというシステム。初めは、分かっても答えなかったが、それじゃ、勉強にならないと諭すと、自発的に答えるようになった。	考えさせれば、自分達で話し合っただけで答えをだす力がある事を見出す。これからは時間の許す限り自ら考える力を育てるよう促したい。	7 人
B 10:00	「ある」と「いる」のちがいの学習。プリントを活用する。物の名前を日本語で学習し、次いで「ある」と「ない」に分類していく作業をする。	ひらがなが書けない生徒もいるので、単語で時間をとる。「ある」と「ない」に分類では、その理由を自分達で気づく事ができなかった。タイナがポルトガル語で説明して、初めて理解できたようだった。	「せいじょう小学校」から来たCがその違いを皆に教えてくれたが、彼女は日本語に問題はないようだ。3年生で習得すべき漢字をドリルか何かを使用して個人的に進める必要がある。	10 人
C 11:00	先日習った色と同じ色の果物と野菜を学習する。(桃、イチゴ、リンゴ、バナナ、レモン、トマト、きゅうり)。名前を知り、それぞれを用意した画用紙のかごに貼り付ける。	食物には、大変な興味を示した。色の名前は、あまりよく覚えておらず、果物と結びつけると喜んで覚えた。はさみで切ったり、のりで貼ったりする事を体験し、こちらの指示にもよく耳を傾けていた。	体験を通じた学習のスタイルが、この子ども達にはあっているのかもしれない。当分は、何か実際に製作したりする事を通して、聞く姿勢を育てて行きたい。	7 人
<p>《全体の印象》                      子どもたちが潜在的に持っている能力を認識する。彼らには、無限の可能性がある。</p>				

学習記録 (7回目)

2009年2月27日(金) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	プリントを活用し、物の数え方を学習する。ホワイトボードに書き出して「ほん、ぼん、ぼん」の仕組みを理解し、「匹」にも活用する。	このクラスは理解度が抜群。直ぐに「ほん、ぼん、ぼん」の仕組みをのみこんだ。ただ、自分のプリントに書く事を惜しむ。書く事を通して頭に入れることを強制しなければならなかったが残念だ。	楽しい雰囲気の中で勉強するのは良いことだが、ちょっと冗談が過ぎる所があるので、けじめをつける必要がある。	7人
B 10:00	プリントを活用し、物の数え方を学習する。ホワイトボードに書き出して「ほん、ぼん、ぼん」の仕組みを理解し、「匹」にも活用する。	日本人でも難しい物の数え方。論理的に説明するのは困難なので、実際に表に書いてみると、意外と簡単に理解できた様子。ただ、生活に適應するには練習が必要。	Hは会話には興味を示すが、書き方には取組まない帰来がある。宿題も今日はして来なかった。帰る前にもう一度、個人的に呼んで宿題を確認して帰すが注意が必要な生徒。	10人
A 11:00	ひらがなの書き方をすすめてみる。か行まで終わったので、単語を書いてみる。	書き方の時には、机で。指示語の体得には、教室に空間を作り、机から離れてゲーム感覚で身につけてみる。狭い空間で肌で触れ合う為、集中力も増し、効果的であった。	活動と机の上の勉強を空間から分けたほうが、彼らにはメリハリがついてよさそうだ。短時間しか集中力が持たないので、こちらの工夫が大事。	7人
<p>《全体の印象》 勉強意欲は感じられる。それをどのように学力に結びつけることができるかが教師の役割であろう。少なくとも彼らの意欲を失わせず、高めていくことが大事である。</p>				

学習記録 (8回目)

2009年3月2日(月) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	プリントを用いて「あの、その、この」の使い分けを学習する。会話では部屋にある物を活用して、生徒に質疑応答させる。漢字の書き方の練習。	とにかくこの課題は練習しかないので、部屋にある物に名前を貼り、全員に次々に質問し、答えさせた。質問の数をこなして行くうちに、表現には規則があることに生徒自身が気付いていた。	会話は答える事は簡単だが、質問する事が不得意な様子。できるだけ「間違え恐れ」から、自由になるように生徒を励ます必要を感じた。	7人
B 10:00	プリントを用いて「あの、その、この」の使い分けを学習する。会話では部屋にある物を活用して、生徒に質疑応答させる。漢字の書き方の練習。	上記に同じく授業を進行させたが、生徒の反応は日本語だけでは全員の理解が乏しく、Jのポルトガル語で補ってもらった必要があった。	課題が複雑になるとこのクラスには困難が生じる事が分かる。もう少し教諭側の工夫があれば、生徒も喜んで学習できるのではないかと感じた。	9人
A 11:00	色の学習の仕上げとして、戸外で「色つき鬼」をして遊ぶ。	助手として、一人のペルーの青年と一緒に遊んでもらう。遊びを通して、色の名前を日本語ではっきり認識した様子。	色の名前や挨拶は生活の中での体験で自然と身につけていくもの。今回の遊びを通して再確認する。これからもこのような学習方法を取り入れていきたい。	7人
<p>《全体の印象》 クラスの雰囲気はよく、子どもたち同士で助け合っている。午後の授業でも大きな子が小さな子の面倒をよく見ている。全体にきずなのようなものができてきている。</p>				



学習記録 (9回目)

2009年3月4日(水) 科目: 日本語 担当: 山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	前回の続き。「行く」と「来る」の違いと、使い方を勉強する。漢字の書き取り。	会話だけでなく、自分で文章を製作してノートに書いてもらい、個人的にチェックして行った。彼らも嫌がらなかったし生徒の理解度がよく把握できた。	Fが書くことを嫌がる。出来ないのではなく、面倒臭い様子。励ましながら書かせる。	7人
B 10:00	前回の続き。「行く」と「来る」の違いと、使い方を勉強する。漢字の書き取り。	反応が見たかったので思い切って書かせてみたが、個人で進行が違うので、このクラスにはこのスタイルがあっているのかもしれない。	今日はTも「言わないで」と教諭から合図されずに、伸び伸びと個人のノートに書いていたので、見ていてこちらも嬉しかった。A、N、Pには常に個人指導が必要。	11人
A 11:00	前回の続き。「ある」と「ない」の学習。ひらがなのかきとり練習。	宝探しゲームを通して、「あった」「ない」を体感した。楽しんでいた様子。	動と静の空間がどうしても必要なクラス。いつも工夫が必要なので、教諭側も少々大変ではあるが、必要であろう。	7人
<p>《総評・反省事項及び留意点など》</p>				

学習記録 (10回目)

2009年3月6日(金) 科目: 日本語 山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	月曜日～金曜日、おととい～あさってなど、時間の空間について勉強する。簡単な動詞(起きる、寝る)を使って、それぞれ表現してみる。	カレンダーの読み方は分かった様子。ただ、これを生活の中の会話にすると、戸惑いが生じた。今日は過去と現在を2つの動詞を使って表現してみるが、BとAには難しかった様子。	これから、毎日授業の前に繰り返し質問としたい。	6人
B 10:00	月曜日～金曜日、おととい～あさってなど、時間の空間について勉強する。クラスの席順に月曜から金曜まで、リレー形式に言わせてみる。	カレンダーの読み方は分かった様子。曜日をリレー形式で言っていくうちに、AとNで躓いてしまい、スピードを上げる事は出来なかったが、友達同士で助け合っている姿が見受けられた。	Bが来ていないので、気になっている。Nは自分で学習しようという意欲に欠けている様子。人に頼ってその場を凌いでいるので、個人指導が必要と思われる。	10人
A 11:00	あいうえお51音を皆で音読する。紙芝居を読む。	「さるかに合戦」を読んでみる。日本語が全く分からない中での紙芝居は少々難しかった様子。	紙芝居は無理だった。雰囲気を変えるために、個人で好きな絵本を手にとって読ませたが、その方が落ち着いて、楽しめた様子。	7人
<p>《全体の印象》</p>				

学習記録 (11 回目)

2009 年 3 月 9 日 (月) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	前回の続きで、曜日を使って現在、過去、未来を意識させる。会話に取組む。 漢字の書き取り。	続きなので子ども達も前回よりは理解を深めた様子。	BとAには、いつも気を配っている必要がある。彼女らが退屈しないように、易しい質問に切り替えるなどの配慮が必要。	7人
B 10:00	前回の続きで、曜日を使って現在、過去、未来を意識させる。会話に取組む。 漢字の書き取り。	このクラスはJとT、Sが授業を引っ張っていく感じが強い。バランスが取りにくい。	できる子と出来ない子の差が激しい。出来ない子どもに劣等感を、出来る子供に優越感を抱かせない為にも、質問を工夫する必要がある。	12人
A 11:00	あいうえお 51 音を皆で音読する。単語の書き取り。	LSが書き取りを嫌がらなくなったお陰で、クラスが落ち着いてきた。	Mが伸びている。LとLSが落ち着いて、座って書く姿勢が出来たので、よかった。続けて励ましたい。	7人
《全体の印象》				

学習記録 (12 回目)

2009 年 3 月 11 日 (水) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	2つのグループに分けて動詞の勉強。動詞の原型から「って下さい」と変化する動詞を集めて、それぞれ動詞の活用を模造紙に書き出す。漢字の書き取り。	始めは取り掛かりが悪かったが、活用の癖が分かると積極的な姿勢に変わり、皆が参加していた。字を書く時には、ブレンダとアンドレッサが書き、皆から字がきれいだと認められて嬉しそうだった。	このようなグループ作業になると、Fの参加があまり芳しくない。頭がいいせいとか、書く作業も少々怠惰気味。個人的に励ます必要がある。	7人
B 10:00	カルタ取りから、ひらがな習得度を測る。漢字の書き取り。	2つのグループに分けてカルタ取りをしてみる。字を読む事に困難がある生徒も、参加する事によって、勉強しなければいけないという気になった様子。	JとBはカルタで遊びたい為に、漢字の書き取りを今までになく迅速に行った。Nは人に取ってもらえばかり…。勉強するように励ます。	9人
A 11:00	右手、右足、左手、左足を色画用紙に紙に書き、本人達の手首、足首に巻きつけて覚える。	手足に巻かれた紙を、子ども達が喜んでいった。実際に左右に分かれた色の確認(赤・緑)と、ノートに字を書く時にも、体験として残った様子。	自分の体に目に見える形で、右と左を画用紙でつけると、喜んでいった。	10人
《全体の印象》 午後は、子どもがあまり喜んでダンスしていなかった。すぐに踊りの合間に私語をするし、ふざけるし。講師のクラウディアさんも気分を害された様子。テレジーニャ(教務コーディネーター)からクラスの後、指導があり、子ども達も理解した様子。「きちんとする」と約束をする。				

学習記録 (13回目)

2009年3月13日(金) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	プリントを使用する。会話として過去形を中心に勉強する。また、主な部分を変えて各自オリジナルの文章を作る。	朗読には問題はないが、原文を変えてオリジナルの文章に変えてみると、助詞や動詞の活用を間違えていた。ただ、間違えている事に気が付いたのでよかった。	会話は何となくできるが、自分自身の事を文章で表現する事が難しい様子。日記などを通して、もっと練習が必要。	6人
B 10:00	漢字のよみかき。その後、カルタ遊びの続きをする。(PとA、Nだけは、個人的に教諭とひらがなの練習)	カルタ遊びからPが外れた事を好機とし、個人的に呼んで、どの程度ひらがなを習得しているのかみた。他2人も練習のしかたを個人的に教えられてよかった。	Bはカルタ遊びが大好きで、遊びたい為に早く漢字の書き取りができた。故にこれまで怠惰でやらなかった事が判明。もう少し自主的に取組むように仕向けていきたい。	10人
A 11:00	チューリップを折り紙で作成する。歌まで進みたかったが、無理。その後はひらがなの書き取り。	クラスで日本語の指示をだしても、耳を傾けることができるようになった。のりやはさみ、その他の教材が必要な時には、必ず日本語で願わせるが、繰り返す事を嫌がらなくなってきた	LとLSが日本語を話す事を、それほど嫌がらなくなってきた。皆、「貸してください」が上手になった。これからも必要に応じて、話させるように仕向けて生きたい。	10人
<p>《全体の印象》 今日は雨天だったため、戸外遊びがカットされ、力を持って余っていた様子。でも、大きな子達が小さな子と上手に遊んでいる姿は、ほほえましかったし、ブラジルの家族的温かさを感じた。</p>				

学習記録 (14回目)

2009年3月16日(月) 科目:日本語 担当:山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	「フレンズ」歌の練習。形容詞を学び、グループ会話と文章を作ってみる。漢字の書き方練習。	はじめは皆中々口を開けなかったが、東京の青年の訪問の際、習った歌なので、直ぐにギターに合わせて歌えるようになった。形容詞はよく理解した様子。助詞が抜けるが、使いこなしていた。	「は」と「が」の使い分けが難しい。練習しかないのだが、できるだけ言いたい事を文章化しようと努力がみられる。これからも励まして、練習したい。	6人
B 10:00	形容詞を学び、グループ会話と文章を作ってみる。漢字の書き方練習。	形容詞は名詞の前に付く事を皆理解した。話すことは出来るが、文章化すると、助詞が抜けることが多かった。漢字の書き方はもうリズムが出来ており、指導し易かった。	会話の部分で、形容詞を使いこなすのに、グループで座らせる事によって、互いに助け合う姿も見られたが、一つのグループでけなしあいが始まり、遊びのようになってしまったので、残念だった。	11人
A 11:00	女の子と男の子に分けて、「勝つ」「負ける」の勉強をした。実際にゲームをしてみて体感させる。	本日の授業で、初めて明確に日本語で、性別の区別が理解できた様子。グループ競争も始めて行ったが、楽しめた様子。	室内では出来ないゲームだった為戸外に出したが、予想通り、指示が通るのが困難になり、難しかった。	9人
<p>《全体の印象》 グループ・ワークがあまりうまくいかなかった。午後の授業では助け合うような活動も見られるので、教える側でうまく制御していくことが大事である。</p>				

学習記録 (15 回目)

2009 年 3 月 18 日 (水) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	「フレンズ」歌の練習。プリントを活用して、動詞の活用の練習をする。	はじめは皆中々口を開けなかったが、東京の青年の訪問の際、習った歌なので直ぐにギターに合わせて歌えるようになった。形容詞はよく理解した様子。助詞が抜けるが、使いこなしていた。	歌が上手いFが休みで、本番当日の為、皆焦ったようだ。Jが手話を習得し、何とか自分達の力で、やっつけようとする意気込みはえらかった。	6人
B 10:00	プリントを活用して、動詞の活用の練習をする。終わった生徒は、漢字の書き取りの練習。	プリントだけでなく、質問に対し文章化してノートに書く作業は、大変なになっている様子。終わった生徒には漢字を用意しておいて各自に仕事を続けるリズムができた。	いい感じで授業が運んだ。Jはふざけがひどいので、何度も声掛けをして、勉強に引き戻す必要があった。Nには、Cを傍につけて援助してもらった。	10人
A 11:00	ひらがなの51音を音読。書き方の練習。動詞「食べる」の練習。	今日は生徒に、昨日の戸外ゲーム学習で、教諭の指示を生徒が聞かなかったことを指摘し、お話が聞けるようになるまで、室内での学習しかない事を、伝えた。そのせいか、今日はかなり意欲的に書き方の練習に取り組んでいた。	道理をもって、子ども達の良心に訴えたのが良かったのか、彼らも納得した上で、学習を進めることができた。	10人
<p>《全体の印象》                      課題「人を喜ばせる」に対して、Cの子ども達が積極的に取り組んだことに驚きを感じた。</p>				

学習記録 (16 回目)

2009 年 3 月 20 日 (金) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	買い物ごっこの導入として、日本円の数え方と漢字での書き方を学ぶ。	おもちゃの日本円札を利用して、漢数字の復習と、お金の数え方を学ぶ。皆、お金には興味があるので、取係りが良かった。ただ、漢数字での書き取りは少々難しかった様子。援助が必要となる。	2つのグループに分かれた机の配置になっているので、自然と男女に分かれてしまう。FとFに手をかけすぎて、他の子供が退屈になっていた気がする。	7人
B 10:00	買い物ごっこの導入として、日本円の数え方と漢字での書き方を学ぶ。	実際にお金を「お小遣い」として配布し、「数える」という動詞と組み合わせる授業を進行する。漢数字で書き取りをし、各自終わったら「お小遣い下さい」と、要求するシステム。楽しんで取り組んでいた。	Aが今日はよく学習していた。お金の数の概念は生活に未着している為、理解し易かった様子。ただ、いつもNが置き去り状態なのが気になっている。	10人
A 11:00	数字を1～10まで、ひらがなで書いてみる。終わった順に、お金を入れる財布を紙で製作。	書き取りが苦手なグループ。今日は、一列ずつ書き終えたら、数字毎にシールをご褒美として貼っていった。これが大変嬉しかったらしく、皆意欲的に喜んで書き取りをしていた。	風邪で欠席者が出ている。シール作戦は大成功。「できた」「シール下さい」の言葉も同時に習得できたので、よかった。授業終了時には、もう一つ「チョコレート下さい」も練習し、実際に小さなチョコを食べて喜んでいった。	9人
<p>《全体の印象》                      全体的に、「お金」には皆一様に興味があり、学習度が高かったように思う。特に、漢数字も楽しく学び、書き取りも正確にできていたので、手法としては大変良いと思われた。</p>				

学習記録 (17 回目)

2009 年 3 月 23 日 (月) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	宿題の点検と復習をする。「さるかに合戦」の紙芝居を見て、感想を言い、文章で書いてみる。	初めての試み。聞き取りの練習と理解した事を言葉と文章で表現してみる。初めは戸惑いを見せたが、分からない単語を仲間同士で助け合っていた。言う事は簡単だが、文章化すると難しかった様子。	意外にも、いつも解っている F が文章化の段階で分からなかったらしく、初めて助けを求めてきた。A と F を援助する。	6 人
B 10:00	ノートに書き取りの練習。(自分の言葉で「食べる」と「行く」の文章を作る。	以前、会話では使った動詞だが、文章化するのは、難しかった様子。ただ、できた子には、文章を複雑化させるよう励ました(いつ、だれが、どこで、だれと、何をした)。	P も終わったら自分で「終わった」と意思表示できるようになった。他の生徒も続けて励ます必要がある。	11 人
A 11:00	書き取りの練習。カルタを使って、ノートに書いてみる。	かなり自主的に取組んでいた。全ての生徒が「つかれた、書きたくない」という言葉を言わなくなっている。課題が終われば、「次は、何を書くの?」と一人ひとり尋ねて来るようになった。	全体的にクラスの雰囲気が変わった。皆がきちんと座り、必要な言葉は、嫌がらずに日本語で表現できるようになっている。上手に言えたら(言えなくても)とにかく褒めること!	10 人
<p>《全体の印象》 クラスにまとまりが生まれ、学校らしくなった。</p>				

学習日誌 (18 回目)

2009 年 3 月 25 日 (金) 科目：日本語 担当：山下千賀子

クラス	内容	理解	留意点	参加人数
C 9:00	「感謝をしたい人への手紙」を作成する。	手紙の書き方を説明し、折り紙、シールなどを使用して、オリジナルの「感謝の手紙」を書いたが、皆工夫して、意欲的に取り組んでいた。あまり援助する必要はなかった。	今後、手紙のやり取りに活用して欲しい。	7 人
B 10:00	「感謝をしたい人への手紙」を作成する。	いろんな人に感謝している子どもの姿が見られた。一人ひとり、真剣にまた、楽しく手紙を作成していた。P も熱があったが、最後までがんばって仕上げていた。	楽しかった思い出をそれぞれが文章化して表現する事を楽しんでいた様子。「あれも、これも」と、考えて書く楽しさを知ったようだった。	11 人
A 11:00	「感謝をしたい人への手紙」を作成する。	同じように紙に手紙を書く。ただ、「○○さんへ、ありがとう、○○より」と簡単な内容に留めた。シールや折り紙を使用して、仕上げていた。	楽しそうに取り組んでいた。先生に書く子どもよりも、友達に宛てて書いている子どものほうが多かった。これから遊びの中で「手紙を書く」楽しさを味わって欲しい。	10 人
<p>《全体の印象》 今日は終了式ということで、朝から「今日は最後でしょ」と尋ねてくる子どもが多かった。各授業で春休みも必ず字を書く練習と、日本語のテレビを見る事、買い物に行ったら字を読む練習を意識的にすることなどを約束する。</p>				